OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	Gallia48号 卒業論文要旨
Author(s)	
Citation	Gallia. 2009, 48, p. 85-86
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/21772
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

卒業論文要旨

ジャック・プレヴェールの詩集 *Paroles* における《太陽》

岡井康香

20世紀の詩人兼シナリオ作家であったジャック・プレヴェール（1900-1977）は、平易な言葉遣いと優れたユーモア感覚、鋭い風刺性が作品の特徴として知られている。1946年に出版された彼の代表作ともいうべき詩集 *Paroles* において、様々な語が象徴的に使われているが、プレヴェールはその中の一つである «le soleil»「太陽」を生命、喜び、幸福、自由、美、真実の象徴として描いている。太陽は、労働者、貧しい人々、戦争の犠牲者、国家から抑圧される人間たち、カタツムリや犬といった動物など、作者が常々共感を寄せていた存在の前に登場し、時に彼らの抱えている苦しみや悲しみを取り除く役割を果たす。たとえば、葬式という死の儀式に参加できず落胆したカタツムリに、生きる喜びを与えたのは太陽であり、過酷な条件で働かされる労働者たちが人間らしい幸せな生活を取り戻せるように助けたのも太陽であった。さらに«le soleil»が「太陽」と「ひまわり」両方をさすことから、プレヴェールは太陽を花としても扱い、詩の中で同じ喜びや自由を象徴する「春」、「鳥」などの語と組み合わせて使っているが、こうした太陽のイメージは *Paroles* 以外の詩集や絵本などにも共通して見られる。

Paroles における太陽の表現で重要なのは、「思考」や「虚偽」など人間が作り出した否定的なものと、太陽が対立していることである。そこには、本当の幸福や美しさ、真実を自己の利益のために見失ってしまう人間の愚かさと、人間の自然に対する傲慢さへの警告・批判がこめられている。プレヴェールが、自分の尊んだ価値を象徴する存在として太陽を選んだのは、まさにその自然に対する尊敬と愛情からであったと考えられる。

《母》としてのデボルド＝ヴァルモール－詩作における《子ども》のイメージ－

林　英一

マルスリーヌ・デボルド＝ヴァルモールは主に19世紀前半に活躍した女性詩人であり、とりわけ詩篇「サーディの薔薇」で知られている。だが、他の詩作品はまだあまり知られていない。彼女は子どもをモチーフにした詩を数多く遺している。彼女自身、4児の母であったこと、及びその内3人の子どもたちを次々と失ったことが詩作の一つのきっかけとなっており、実際に我が子への限りない愛情、幼くして子どもを亡くしたことへの悲痛な訴えなどを詩にしている。しかし、彼女は我が子だけを詩作の対象としたのではなく、はしゃぎ回る子どもたちの無邪気さや悲惨な状況にある孤児への憐みなど、子どもに関するより普遍的なモチー

フをも詩のテーマとして扱っている。彼女の詩において、しばしば用いられる2種類のモチーフがある。《鳥》と《天使》である。どちらも翼を持つ存在であり、《鳥》は子どもの持つ愛らしさや自由さを象徴する役割を、《天使》は詩人と神とを繋ぐメッセンジャーの役割を与えられている。また、彼女の詩では命令法が多用されている。これには子どもたちを教え導く強い母の姿が反映されていると同時に、日々の辛い暮らしの慰めを子どもたちに求めるという弱い母の一面も現れている。彼女の子どもをテーマとする詩の根底には、子どもたちの幸福を願う母としての率直な思いが流れている。《鳥》や《天使》といったシンプルなイメージの使用、子どもたちへのメッセージを命令法という直接的な形で伝えることなどがその具体例と言えよう。彼女を賞賛した他の詩人たちが指摘するように、技巧を凝らすのではなく「母親として抱く熱烈な思いを、詩という作品の中に素直に表現する」ところに彼女の詩の美しさと新しさ、独自性があったと言える。

モーパッサン『女の一生』におけるヒロイン像

松　平　裕紀子

モーパッサン『女の一生』の女主人公、ジャンヌについて考える。ジャンヌは一般的には、人生において何も期待せず、理解しない女性だといわれる。作中では、ジャンヌは他の登場人物に活躍の場を譲り、主人公であるというより、観察者であるようだ。しかし、果たして本当にそういえるのだろうか。ジャンヌが自発的に行動したと思われる場面を提示、分析し、行動の原因にせまりたい。

第一章では、1．ジャンヌが夫に反対し、女中を守る場面。2．夫を憎んでいるにもかかわらずもう一人の子どもを望む場面。3．心身ともに弱りきっていたが、息子を探しに単身パリへ行く場面。この三つの場面を取りあげ、考察する。これらの場面は会話文が比較的多い場面となっている。そこで、まず会話がこの作品の中でどのような役割を果たしているか分析する。後に、ジャンヌがどのような状況を乗り越えて行動するに至ったのか、行動した際の彼女の態度や発言を元に、ジャンヌは本当に強い思いを持って行動しているのか分析する。

第二章ではジャンヌがなぜ行動するに至ったのかの背景にせまる。三つの場面の共通点を考えると、ジャンヌは、家族と言える自らに近しい存在のために行動したと考えられる。彼女には、この作品のテーマの一つである孤独が与えられている。ジャンヌは、一見孤独であることを受け入れているようだが、常に愛し愛されることを望み、一人になることを恐れていた。彼女が自分は孤独であると意識するとき、ジャンヌはそれを解消するべく、行動したといえるのではないか。行動の結果はいつも彼女に更なる幻滅をもたらすだけであるが、全編を通して、彼女の姿勢が変わることはない。

以上を持って、ジャンヌは、強い意志も兼ね備えた女性であり、いざというときには持ちうる力を全て使って、行動することができる。こういったジャンヌの一面を提示できたものとする。